

## 永 福 智 志

福島県立医科大学システム神経科学講座教授



2013年7月1日をもちまして香山雪彦教授の後任として福島県立医科大学医学部システム神経科学講座（旧神経生理学講座）主任教授に就任いたしました。私は1990年に富山医科薬科大学医学部医学科を卒業後、直ちに大学院に進学し、その後、ついこの6月まで、富山大学大学院医学薬学研究部統合神経科学講座（旧富山医科薬科大学医学部第二生理学講座）に所属しておりました。在職中は小野武年先生、西条寿夫先生、田村了以先生はじめ多くの先生方にたいへんお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。この場をお借りして厚く御礼申し上げたいと思います。

私はこれまで23年間、主に霊長類であるサルを主な実験動物として用い、中枢神経系における情報処理機構について研究を行ってまいりました。

大学院では、実験室内の様々な場所で contingency が異なる複雑な連合課題を行っているサルの海馬体からニューロン活動を記録し、サル海馬体における情報表現についての博士論文をまとめて学位を頂きました。

その後、米国国立衛生研究所（NIH）の Robert H. Wurtz 先生のもとに客員研究員として留学する好機を頂き、サルの MST 野、MT 野における運動視や立体視の情報処理機構についての研究に従事させていただきました。Wurtz 先生とは、ちょっと失礼な言い方かもしれませんが、非常に波長というか“ウマ”が合ったと思います。約3年間でしたが、研究者としてたいへん多くのことを学ばせて頂き、それらは今なお私の研究に対する考え方の根底にあるといってもいいと思います。

帰国後は現在に至るまで、サル下部側頭皮質における視覚認知・記憶の神経機構について研究を行ってまいりました。とくに極めて生態学的な視覚刺激であるといつてよい「顔」の認知・記憶の神経機構の研究、具体的には、「顔ニューロン」の研究を主軸としてきました。現在、顔認知の神経機構に関する研究は、サルでの顔ニューロンの研究に限らず、ヒトでの機能的 MRI や MEG あるいは NIRS を用いた研究なども巻き込んでたいへんな活況を呈しています。そんな顔研究の流れの中で、サルの側頭皮質の腹側部に、個体のアイデンティティに関する情報を表現する一群の顔ニューロンを見つけたことは割と早い成果ではなかったかと思います。

そしてこの度、幸運にも福島県立医科大学・医学部のシステム神経科学講座を担当させていただくことになりました。本講座には前任の香山先生が培われてきた電気生理学の優れた伝統があり、熟練したスタッフがそろっています。これから私は本講座で、これまでの認知行動下の動物からのニューロン活動記録・解析に関する私自身の技術や経験を最大限に生かし、またヒトでの機能的脳イメージング研究など新たな研究分野に果敢に挑み、げっ歯類やヒトをも対象とした、多角的な脳研究を広く展開させていきたいと考えています。着任してもう少しで2か月になるところですが、徐々にではあるものの環境が整いつつあります。本格的な稼働までにはまだまだ時間がかかると思いますが、今後とも皆様方のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

略歴

1990年 富山医科薬科大学医学部医学科卒業  
1994年 富山医科薬科大学大学院医学研究科生理系専攻修了  
1994年 富山医科薬科大学医学部第二生理学講座助手  
1994年 米国国立衛生研究所 (NIH) 客員研究員  
1997年 富山医科薬科大学医学部第二生理学講座助手復職

2005年 富山医科薬科大学医学部第二生理学講座助教授  
2005年 富山大学医学部統合神経科学講座助教授  
2006年 富山大学大学院医学薬学研究部統合神経科学講座准教授  
2013年 福島県立医科大学医学部システム神経科学講座主任教授